二〇一九年度

東洋大学審査学位論文の要約

片山廣子短歌研究

文学研究科日本文学文化専攻博士後期課程

学籍番号４１４０１４００００２

清水麻利子

目次

序　5
第一章　片山廣子の短歌と芥川龍之介
芥川への書簡と歌稿に込めた再生への祈り　6
はじめに　6
一、芥川龍之介宛片山廣子書簡　10
二、歌稿「追分のみち」と「日中」　13
三、片山廣子と芥川龍之介の作品を巡って
おわりに
第二章　大伴家持を詠む片山廣子短歌の考察
芥川龍之介宛書簡の短歌から繋がる歌心　18
はじめに　19
一、大伴家持を詠む「ひばりの歌」十二首　27
二、芥川龍之介宛書簡の短歌
おわりに
第三章　片山廣子の短歌『いさゝ川』から『心の花』へ
初期歌風の形成を巡って　32
はじめに　33
一、片山廣子の佐佐木信綱への入門　34
二、歌誌『いさゝ川』における歌の出発　41
三、歌誌『心の花』における初期歌風の形成
おわりに
第四章　佐佐木信綱と片山廣子
廣子の信綱宛書簡と『心の花』歌稿を巡って　53
はじめに　53
一、明治期　佐佐木信綱を師と仰ぐ　55
二、大正期　第一歌集『翡翠』の見残しゝ夢　59
三、昭和期　第二歌集『野に住みて』と随筆集『燈火節』
おわりに
第五章　片山廣子の短歌とアイルランド文学
遠きわたつみを夢見た「越びと」と芥川龍之介　66
はじめに　66
一、短歌からアイルランド文学へ　67
二、翻訳の特徴と短歌への反映　73
三、遠きわたつみを夢見た「越びと」と芥川龍之介　75
四、アイルランド文学から短歌へ

おわりに
資料　片山廣子（松村みね子）翻訳年譜
第六章　東洋英和女学院への片山廣子寄贈本から見えてくるもの　82
はじめに～片山廣子と東洋英和女学院　83
一、芥川龍之介～「越びと」へ送られたエール　86
二、堀辰雄～創作ノートとしての短歌　89
三、与謝野晶子～「匂ひやかなる」距離　90
四、佐佐木信綱～変わらぬ慕情　92
五、古典文学～古典からの受容　94
六、片山廣子～野へ向かう心　97
七、その他の人と作品～歌の変貌
おわりに～「寄贈本」から見えてくるもの　101
資料（片山廣子氏寄贈本）東洋英和女学院史料室だよりNo.67　104
付論　村岡花子宛片山廣子書簡（東洋英和女学院所蔵）からの考察
第七章　片山廣子短歌研究
われ－生くる我とゆめみる我と　116
はじめに
一、鳥　117　二、我　120　三、心　123　四、夢　125
五、色　127　六、動植物　130　七、野　135
おわりに
第八章　片山廣子短歌研究
家族－花のごとく木草の如く　144
はじめに
一、父・母　145　二、夫　148　三、子　153
おわりに
第九章　片山廣子短歌研究
死生観－おもひのままに生きて死なばや　159
はじめに
一、生　160　二、老・病　163　三、死　164　四、戦争・平和　167
五、食　170　六、暮らし・旅　172　七、歌　176
おわりに
第十章　芥川龍之介・片山廣子短歌の創作と交流　181
はじめに
一、芥川龍之介の短歌　182
芥川龍之介と短歌
短歌による抒情的出発（明治四二年から大正元年）
表現の修練としての短歌（大正二年）

『心の花』『帝国文学』への短歌の掲載と評価（大正三年）
第三次『新思潮』創刊・抒情の湧き水となった短歌と小説（大正三年）
大正歌壇における批評家としての芥川
「有難さ」としての短歌
二、大正歌壇における芥川龍之介の短歌・歌論　203
芥川龍之介の短歌の変容
新進作家としての出発と、片山廣子『翡翠』の批評（大正四年から大正五年）
斎藤茂吉との出会い（大正六年から大正八年）
中国特派員体験と今様体（大正九年から十年）
大正歌壇と、『橄欖』における芥川の短歌と批評（大正十一年から十二年）
芥川龍之介の「うたのゆくえ」
三、短歌と小説の間　221
中国視察旅行からの「表現」と「抒情」の変革
『支那游記』　聴覚への刺激と中国への視線
大正歌壇における芥川龍之介の今様と旋頭歌
芥川の旋頭歌「越びと」の考察
短歌と小説の間　「秋」「六の宮の姫君」「保吉の手帳から」「白」「河童」「蜃気楼」
芥川龍之介・片山廣子の短歌
おわりに
資料　片山廣子（松村みね子）略年譜　243
結語　250
初出一覧　254
謝辞　255

一、本論文の目的

明治十一年（一八七八）に東京麻布に生まれた歌人の片山廣子（筆名、松村みね子）は、芥川龍之介が「才力の上にも格闘出来る女」と敬慕し、最後の恋人「越びと」として語られることが多い。『翡翠』（大正五年）『野に住みて』（昭和二十九年）の二冊の歌集を残している。

第一歌集『翡翠』の短歌

よろこびかのぞみか我にふと来る翡翠の羽のかろきはばたき

わが指に小さく光る青き石見つつも遠きわたつみを恋ふ

我が世にもつくづくあきぬ海賊の船など来たれ胸さわがしに

第二歌集『野に住みて』の短歌

待つといふ一つのことを教へられわれ髪しろき老に入るなり

動物は孤食すと聞けり年ながくひとり住みつつ一人ものを食へり

わが側に人ゐるならねどゐるやうに一つのりんご卓の上に置く

夢想的な『翡翠』から、平明な生活詠の『野に住みて』へ、二冊の歌集には歌の変容を見て取ることが出来るが、共に内面を凝視した、今でも色褪せない感性を持つ短歌は、十分には評価をされていない。他方、アイルランド文学翻訳家の松村みね子の名で知られ、森鷗外、上田敏、菊池寛らから高く評価された。

廣子は、後にイギリス総領事となる外交官を父に持つ。幼い頃から、外国の絵本を通して英語に親しむ。東洋英和女学校に学び、西洋的で自由な気風の教育を受け、「とらわれぬ我」でありたいと願い続ける。

本論文では、新派の発生から自然主義を経て戦後短歌に至る潮流の中で、同時代の歌人との対比による、「われ」を詠む片山廣子短歌の独自性の究明を目的とした。

二、研究の方法

研究に際し、廣子の歌集・随筆・翻訳・小説・書簡等の資料と、廣子に言及した周辺資料を調査分析して考察を進めた。これに当たり、後述のように、貴重な資料を活用することが出来た。具体的には、本論文の構成と共に述べてゆきたい。

三、本論の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

第一章「片山廣子の短歌と芥川龍之介　芥川への書簡と歌稿に込めた再生への祈り」

本稿は一節にて、吉田精一と辺見じゅんが引用した書簡と、『高志の国文学館　紀要』第1号の書簡を分析した。二節では、「追分のみち」と「日中」の短歌を比較した。三節では、関連する作品を採り上げ、芥川との交流が片山廣子の短歌に与えた影響を考えた。

大正十四年（一九二五）三月の『明星』に、芥川は廣子への切ない恋心と訣別の思いを詠んだ、旋頭歌「越びと」を発表した。昭和二年の六月末、堀辰雄を案内に廣子の家を訪問した芥川は、翌月の七月二十四日、自裁をする。そして、片山廣子には芥川龍之介の最後の恋人というイメージが付き纏う。大人の切ない恋のロマンとして、「越びと」が読まれてきた。

時に、廣子が芥川に宛てた手紙の存在が明らかにされる。吉田精一は昭和四十六年十一月、『歴史と人物』（『中央公論』）に「芥川龍之介の恋人」を発表し、芥川の一方的な恋ではなく、むしろ廣子の恋情が強かったことを、手紙の一部で解き明かした。吉田の没後、所在不明であった書簡は、歌人であり作家の辺見じゅんに渡った。吉田と異なり、辺見は、平成四年九月十一日朝日新聞夕刊「散策思索」欄の「芥川と「越し人」」に引用した際に、アイルランド文学翻訳家としての廣子の芥川への思いを、大正浪漫的な時代の中で文学に注いだ熱情であったと読み解いた。筆者は、恋情に光を当てた吉田と、文学への熱情を掬い取った辺見との違いを指摘し、書簡中の廣子の心情を読み取ることで辺見の捉え方を支持した。

現在、書簡は富山の高志の国文学館（館長中西進）の所蔵となる。平成二十九年一月、『高志の国文学館　紀要』第1号にて、綿引香織学芸員の労作による「芥川龍之介宛片山廣子書簡軸　翻刻と注釈」が発表された。書簡十四通のうちの一通に、歌稿「追分のみち」が添えられている。大正十五年八月、『三田文学』に発表された「日中」の草稿であることが分かった。高志の国文学館所蔵「芥川龍之介宛片山廣子書簡」に於ける、廣子の心情と短歌作品への反映を分析した。

廣子には、堀辰雄が描いた自己を抑える女性像とは違う、囚われず自由に生きたかった、見残した夢への情熱があった。生きることの不自由さ儚さに閉塞感を抱く現実を離れ、アイルランド文学へと空想の羽を広げることが、こうありたいと願う自身の内面とも向き合うことになった。そして、その思いが芥川にも向かったと言える。芥川への書簡と歌稿に込められたのは、廣子自らの再生への祈りであったことを確認した。

第二章「大伴家持を詠む片山廣子短歌の考察　芥川龍之介宛書簡の短歌から繋がる歌心」

「ひばりの歌」（『心の花』昭和二十二年六月）十二首の短歌には、「大伴家持の歌をよみかへす折ありて」の言葉を添えてある。『心の花』では、佐佐木信綱に古典の薫陶を受けていたことから、万葉集からの受容も見逃してはならない。第一一六回全国大学国語国文学会冬季大会のテーマ「日本海を望む詩心」に沿って論文をまとめた。越中守であった万葉歌人の大伴家持を詠んだ廣子の短歌、「ひばりの歌」をとりあげることによって、廣子短歌に於ける万葉集受容を探究した。

射水川あさ漕ぐふねの船うたを館にひとり守がききゐし
み越路のましろの鷹をうたに詠みて鄙のむすめは見かへりもせず

十二首中の二首である。この連作において、心情は素朴で抒情豊かに、自然は人間と一体化して詠まれている。家持の人生に、廣子自らの境涯を重ね合わせて詠んだ歌にも焦点を据えた。家持の歌に「物はかない気持」を読み取り、自身の人生を重ねて歌に詠み込んだことが、「われ」を表象する近代短歌として評価できる。

また、先に述べたように、芥川龍之介に、大正十三年秋から翌年冬にかけて廣子が宛てた書簡は現在、富山の高志の国文学館の所蔵である。『高志の国文学館　紀要』第1号の「芥川龍之介宛片山廣子書簡軸　翻刻と注釈」掲載の、書簡中の短歌三首の中の一首、〈いやはてに浅間の山をかへりみてうつし身をたまははなれゆきけむ〉（大正十四年八月三十日付書簡）は、憧れる心で山を詠み作歌のモチーフとし、「ひばりの歌」に繋がる。「ひばりの歌」には、虚無的な気質と多くの死別を経験した廣子の孤独と憂鬱や、陰影を持つ歌心が反映されていることを確認した。

第三章「片山廣子の短歌『いさゝ川』から『心の花』へ　初期歌風の形成を巡って」

片山廣子は第一歌集『翡翠』に、『いさゝ川』『心の花』などに発表していた明治四十一年（一九〇八）以前の短歌を載せていない。それらの歌の特色は、嘆きを詠んだ歌や恋歌であり、何かに囚われた思いが強い一方で、シニカルで小気味よい清新な歌もある。

明治四十二年以降、大正五年発行の『翡翠』までは、写生の歌とともに、比喩的、空想的な歌を多く詠むようになる。この傾向が、アイルランド文学の翻訳へと進ませたのではないだろうか。真摯に自己と向き合う『翡翠』の歌風は、旧派和歌の美しい詩歌の境からも、囚われる自我からも離れ、独自の夢想的内面世界を模索することで確立する。従来研究されていない、『いさゝ川』掲載の初期の短歌作品に焦点を据え、廣子短歌の旧派の歌風から近代の歌風への移行の過程を考察した。

若い頃の歌は、夢想的な思索の歌である。特色ある大正歌壇の中で、第一歌集『翡翠』（大正五年三月）からは、〈よろこびかのぞみか我にふと来る翡翠の羽のかろきはばたき〉など、「われ」と対峙し、囚われず偽ることなき自分の歌を詠んだ歌人としての姿勢が明確に表現されている。本論では、『翡翠』に載せていない、『いさゝ川』（明治二十九年十月創刊）から『心の花』（明治三十一年二月創刊）の明治四十一年掲載までの短歌に着目して、初期歌風の形成過程を辿った。『翡翠』の清新さに繋がる、自己の内面にある「われ」をうたう歌風の確立過程を明らかにすることで、片山廣子の短歌を、近代短歌の流れの中で位置付けることができると考えたからである。平易な詞と身近な素材で共感を得る、晩年の歌集『野に住みて』の歌の出発点が『いさゝ川』に既にあったことを確認できた。初期の歌を第一歌集『翡翠』入れなかったことで、「われ」を詠む清新な廣子の短歌が読者に理解しがたいものになったことを指摘した。

第四章「佐佐木信綱と片山廣子　廣子の信綱宛書簡と『心の花』歌稿を巡って」

佐佐木信綱の指導を受けた多くの女流歌人の一人、片山廣子は、アイルランド文学翻訳家の松村みね子の名で知られ、森鷗外らからその実力を絶賛された。輝かしい活躍を

しながら翻訳をプツリと止め、晩年になって再開する。また、『心の花』の歌人として師の佐佐木信綱との絆を保ちながらも、一時期は短歌を詠むことも止める。時を隔てて、『翡翠』『野に住みて』の二冊の歌集しか残されていない。「清新といふことが詩歌の精神である」とした信綱は、廣子の歌を「清新」と評し、短歌を続けるように励ました。

佐佐木信綱記念館所蔵の廣子の信綱宛書簡と『心の花』歌稿は筆者が初めて考察し、二人の師弟関係を確認した。時代と境遇に翻弄されながらも、翻訳に短歌に、信綱との長きにわたる師弟関係が廣子を育て、歌も夢をも育ててきたことが分かった。

研究にあたり、佐佐木信綱記念館（三重県鈴鹿市）にて、館所蔵の資料六点を閲覧した。鈴鹿市教育委員会の許可を得て、論文作成に特別利用する。書簡の引用にあたっては、一部を掲載する。佐佐木信綱宛、片山廣子書簡四通（明治三十九年二月一日付、大正五年十月十一日付、昭和二十一年四月二十五日付、昭和二十四年九月二十七日付）。片山廣子歌稿二点（大正元年十月号『心の花』、昭和十二年五月号『心の花』）。

第五章「片山廣子の短歌とアイルランド文学　遠きわたつみを夢見た「越びと」と芥川龍之介」

明治三十四年、『心の花』に「自然の美」（ミラー）の廣子による翻訳が初めて掲載される。大正三年から本格的に翻訳に取り組み、「満月」（レディ・グレゴリー）を始め、翻訳を次々と発表し、当時はアイルランド文学翻訳の第一人者であった。

アイルランド文学の何に着目し、どのような点が廣子の文学的感興をそそったのか。新たな人生を生きようと葛藤する廣子が、「明るいワイルドな文芸」に感興をそそられて翻訳を始めたことを自身で述べている。では、それらの受容が、短歌にどのように反映されたのか。翻訳作品や二冊の歌集、随筆・小説・書簡等の資料と、廣子に言及した関連資料を調査分析して考察を進めた。

惹かれる心と醒めた目の間に揺れる心象詠が若き日の廣子の歌の特徴であったが、第一歌集『翡翠』の歌壇での評価は定まらなかった。そして、継続的に始めたアイルランド文学翻訳について、原文や再翻訳、他者の翻訳との対比から、その変化の過程が確認できた。翻訳の蓄積の過程により、口語のリズムと生き生きとした平易な表現を身に付け、人間味豊かな市井の登場人物たちと出会って、洞察力を深めた。それが短歌にも変革をもたらし、『野に住みて』の軽やかで深みのある生活詠への歌風の変化を確認した。

また、アイルランド文学に造詣が深い芥川龍之介は、大正十四年、廣子への恋心と訣別を詠んだ旋頭歌「越びと」を発表した。「越びと」と芥川に呼ばれた廣子が、芥川と共にアイルランド文学をどう捉え、自身の文学にどのような意味を持たせたのかを探った。

自分自身の人生を生きたいと渇望してきた廣子にとって、アイルランド文学や芥川との交流は、文学的感興を沸き立たせ、自らにとっての文学活動の意義を強く意識させるものであったと言える。芥川に対して廣子は、レディ・グレゴリーとイエーツが手を携えてケルト文芸復興を進めたような関係を、意識していたと考える。

その後、昭和二年の芥川の自裁と、廣子の翻訳の中断は関係があったのか。そして、

廣子が戦後に翻訳を再開し、新境地の短歌を詠んだのは如何なる理由からだったのか。この二点についても考察した。

芥川の死が断筆の理由とする従来の説に修正を加えることが可能と考える。その後も、シング作品の再翻訳や、婦人雑誌への詩や小説の翻訳を連載していることを確認した。昭和五年十一月、堀辰雄が芥川と廣子の娘の總子をモデルにした「聖家族」を発表した。これ以降に翻訳を中断していることが分かった。そして、戦後は芥川や早世した息子や文化に渇望した人々のために翻訳を再開し、短歌は写実や象徴性を含んだ、新境地の平明な生活詠となってゆく。最晩年の廣子は、第二歌集『野に住みて』や随筆集『燈火節』、翻訳『カッパのクー』（オケリー他）を刊行するなど、「見残しし夢」を果たしてゆく。なお、翻訳を中断したと言われていた時期の、シング作品の再翻訳や雑誌掲載の新たな翻訳の発見については、「片山廣子（松村みね子）翻訳年譜」を確認の上、論述に加えた。

第六章「東洋英和女学院への片山廣子寄贈本から見えてくるもの」

平成二十六年三月、東洋英和女学院史料室所蔵の「片山廣子氏寄贈本」を閲覧させていただき、許可を得て本論文の作成となった。「片山廣子氏寄贈本」（百十四冊）に就いて、廣子の読書傾向と教養や交流の経過を本の著者毎に考察した。

「片山廣子氏寄贈本」は、史料室だよりNo.67の保坂綾子氏「東洋英和女学院所蔵「片山廣子氏寄贈本」について」によると、受け入れの詳細は残っていないが、生前寄贈のものと、昭和三十二年（一九五七）逝去の後に、遺族により贈られたものとに分けられる。蔵書印から、中高部の図書室で一般貸出されていたが、一九八〇年代前半頃から貴重書として保管され現在に至る。保坂氏は、「「寄贈本」をあらためて見てみると、文壇のそうそうたる人物の著作や翻訳作品が並ぶ。佐佐木信綱、芥川龍之介、堀辰雄、与謝野晶子、川田順らの著作や歌集、堀口大學、森林太郎（鷗外）の翻訳作品など、挙げればきりがない。なかには片山廣子へあてた著者署名入りの本もあり、歌人・文学者として歩んだ廣子の交友関係を垣間見るようである。」と述べている。芥川龍之介の著書では、署名入りの『羅生門』等数冊が含まれている。廣子の蔵書のうち洋書は、松村みね子の名義で日本女子大学図書館へ寄贈されているという。

寄贈本を巡って、廣子の文学的意識の有様と深まりが見えてきた。読書姿勢は、内面世界を拡げ深めるために、幅広い読書を心がけている。表現面では初期から、写生、写実に関心を持っていることが分かった。

第六章付論の新資料では、「村岡花子宛片山廣子書簡（東洋英和女学院所蔵）」に、翻訳の勉強にと花子に洋書を貸し、人を紹介し、資金援助もする廣子の姿が窺われた。「赤毛のアン」を翻訳した村岡花子は東洋英和女学院の後輩である。花子は同じ寄宿舎の柳原燁子（白蓮）と共に、歌人佐佐木信綱に師事する。信綱の紹介で片山廣子と出会い、本格的に翻訳を始めたのである。後に二人は『火の鳥』の創刊に携わる。廣子が新しい時代を生きる女性の誕生に、積極的に手を差し伸べたことが認められる。

次の第七章、第八章、第九章では、『翡翠』と『野に住みて』を中心に、繰り返し用いた題材やキーワードを詠み込んだ歌に分けて、「われ」を詠む片山廣子短歌の独自性の究明を進めた。

第七章「片山廣子短歌研究　われ―生くる我とゆめみる我と」

片山廣子の「われ」を詠む短歌とは、如何なるものであったのか。様々な歌のモチーフの中で、廣子が繰り返し詠んでいる短歌のキーワードがある。第一歌集『翡翠』（大正五年）と、晩年の歌も収める第二歌集『野に住みて』（昭和二十九年）とは、同じ題材であっても、明らかに違いが感じられる。廣子は『翡翠』に〈生くる我とゆめ見る我と手をつなぎ歩み労れぬ倒れて死なむ〉（青『心の花』第十九巻第二号　大正四年二月）と詠み、これからの人生にどう向き合うかと自問する。「生くる我とゆめみる我と」を託したと思われる、「鳥」「我」「心」「夢」「色」「動植物」「野」の七つのキーワードを採り上げた。そして、それらを詠み込んだ歌の考察を進めたのである。

廣子が繰り返し詠むキーワードの短歌は互いに通い合い、「生くる我とゆめみる我と」の相克を表現し、その折々の廣子の精神世界を表象した「われ」を詠む短歌として、生涯を貫いて詠まれたことが分かった。夢想で形づくる世界から、生活の中の実感から生まれる表現へと、同じ題材であっても歳月と共に明らかに違いがあった。

第八章「片山廣子短歌研究　家族―花のごとく木草の如く」

この章では、父母、夫、子の「家族」のキーワードに纏わる歌を採り上げ、随筆や資料を通して、歌だけでは見えてこない背景を読み解いた。

「父母」―若い頃は母親を醒めた目で見つめ、自身が母となってからは労りを詠む。女である為に思うように生きられない嘆きを、母への思いに込める。また、激動の時代に先祖を背負う母であったという自覚が、歌や物語を紡ぎだす。外交官として様々な困難に堪えた尊敬する父親を詠む歌は、社会を客観視して矛盾を指摘する歌となっている。

「夫」―片山廣子は二十一歳で大蔵省勤務の片山貞次郎と結婚し、二児をもうける。病弱であった夫の看病が続き、大正九年に死別している。大正五年の第一歌集『翡翠』の後は、翻訳に没頭してゆく。夫を詠んだ歌は少なく、夫の仕事や立場を考慮し発表を憚ったと思われる。夫の歌は心の奥に覚めたものがある詠み振りであるが、廣子の生活と文学との心の葛藤が人間的な成長と変化につながり、揺らぎのない伸びやかな歌風となってゆく。

「子」―戦後、廣子が再び翻訳を始めようと思ったのは、早世した息子の遺志と強く感じたからであった。生涯を通じて、子を詠むにも甘さに流されず、一人の人間として接し、冷静で客観的な眼で「子」の歌を詠んでいる。

考察によって、片山廣子の短歌と家族との強い関係性が分かった。家族の制約の不自由さを嘆きつつも耐え忍んだ時間に、「われ」の夢や憧れは深みを増し、再び活躍の場を持つ。家族詠では廣子の人格的な成長が見られた。更に、アイルランド文学の翻訳は人

間関係の洞察力を深く鍛えてくれた。「家族」に纏わる歌は、題材の捉え方や表現に変化が生まれたと言える。

第九章「片山廣子短歌研究　死生観―おもひのままに生きて死なばや」

思索的な片山廣子短歌から感じ取られることが多い、廣子の死生観とその要因、及び短歌作品への反映について考察した。本章では、これらが反映していると思われる、「生」「老・病」「死」「戦争・平和」「食」「暮らし・旅」「歌」の七つのキーワードを詠み込んだ短歌作品を採り上げた。「生」「老・病」「死」「戦争・平和」は、文字どおり生死にかかわるモチーフである。それに対し、「食」「暮らし・旅」「歌」は、廣子らしい視点で独自の死生観を込めているとして、ここに採り上げた。

変化する時代の中で生老病死を辿り、そこに生きる人々の生活を題材にし、歌は詠まれ続けてきた。廣子は明治十一年（一八七八）に東京麻布に生まれ、激動の時代を生きて、昭和三十二年三月に七十九歳で死去する。その境涯は、素封家の一族の長女であって、外交官を父に持ち、東洋英和女学校にて西洋の近代的な教育を受けるという恵まれた環境ではあった。

しかし、深く物事を考える性格と重苦しい自意識に苦しみ、〈ことわりも教も知らず恐れなくおもひのままに生きて死なばや〉（第一歌集『翡翠』大正五年）と詠み、心軽く思いのままに生きて死にたいものだと詠嘆をしている。夫や身近な人達との死別が更に思いを深めた。また、松村みね子の筆名で翻訳をしたアイルランド文学や、芥川龍之介との交流からも、死生観は反映されてゆく。〈人は死に吾はながらへ幾世経て今も親しくいともしたしき〉（第二歌集『野に住みて』昭和二十九年）では、「死の影」が廣子に寄り添って、生かされていると感じる死生観に至っている。老いてからの孤高の日々も、自分を奮い立たせる廣子の生きる姿勢が短歌にあることを指摘した。

採り上げた歌は、死生観や廣子の戦争への批判精神や価値観など、二歌集を通して揺らぐことのない芯になるものがあり、大きくは変化をしていないことが明らかとなった。生涯を通して「おもひのままに生きて死なばや」の「われ」を、心中大切にして詠むことができたモチーフであったことを確認した。

第一章から第九章までは、「片山廣子短歌研究」として論じて来た。次の第十章では、芥川龍之介の短歌を考察した。芥川と短歌との関わりを時系列で辿り、文学的伴侶として惹かれ合った二人の接点について考察することで、廣子の短歌の独自性の究明に繋がると考えた。資料を基にここまで考察を進めてきたように、廣子が翻訳や作歌において常に芥川を意識していたことが分かる。

第十章「芥川龍之介・片山廣子短歌の創作と交流」

第十章では、「芥川龍之介・片山廣子短歌の創作と交流」という視点にて、芥川龍之介の短歌を研究することで、軽井沢を舞台に堀辰雄の「聖家族」など新しい物語を生み、惹かれ合った二人の接点に迫りたいと考えた。更に、研究事例の少ない芥川の短歌を究明することで、「芥川龍之介の最後の恋人」「越びと」と位置付けられてきた片山廣子の、人となりと、短歌史の展開の中での廣子の短歌の特質をも明らかにすることができると考えたのである。また、その翻訳や作歌において常に芥川を意識していたと思われる廣子の立場から、芥川が詠んだ旋頭歌「越びと」を、どのように受け止めていたのかということを確認したい。芥川短歌の研究と共に、強く惹かれあった芥川との交流が廣子の短歌にもたらしたものを明らかにした。

まず、「一、芥川龍之介の短歌」について考察した。芥川は生涯を通して短歌を詠み続け、旋頭歌や今様を加えると、八百首にもなる。歌数では大正二年から五年が多く、その後は多忙な新進作家となり、減ってゆく。次が大正九年、十年に二回目のピークがある。公表歌こそ少ないが、書簡の中には多くの短歌を残し、書簡の内容とともに人間味豊かな芥川像が浮かび上がってくる。俳句と違い、模倣と言われ、良い評価を得られなかった短歌をなぜに詠み続けたのであろうか。ここでは、明治四二年から、大正三年の間に詠まれた短歌を見てゆく。

芥川が身を削るような作家活動の中で、模倣と言われながらも短歌を詠み続けた理由として、心の吐露や癒やしの役目、心と言葉を盛る器としての抒情性の涵養と言語表現の修練、そして、形式と韻律の追究や純粋な短編小説への模索等をあげた。短歌が小説に大きな影響を与えたとは言えないが、芥川龍之介の文学活動に深く関与したことが確認された。

次は、「二、大正歌壇における芥川龍之介の短歌・歌論」である。明治末年から始まった若い歌人たちによる短歌の改革は、大正期の十五年、短歌雑誌の隆盛期を迎えた。多様な内容と表現を持つ、現代短歌に繋がってゆく大正歌壇と、芥川の短歌について考察をした。

芥川が短歌・歌論を通して、大きなエネルギーを持った大正歌壇に向き合ったことは、小説家として鍛錬の場となったと言える。芥川は、大正歌壇の中で優れた歌人たちと出会い、近代短歌の批評にも筆を執り、凝縮された言葉の感性と言語表現の感覚を磨くことで小説に活かしていったことが分かる。

最後は「三、短歌と小説の間」である。芥川の作品が読者を離さない魅力に、抒情性をあげる人も多い。芥川は晩年、谷崎潤一郎と『改造』誌上で繰り広げた「小説論争」で、「筋らしい筋のない小説」や「詩的精神」主張したのはなぜであろうか。

「抒情」は、精神を病んだ母親を持った、小説家芥川龍之介にとって、「哀しさ」を癒し、「生きること」に繋ぎ留める一縷の蜘蛛の糸ではなかったのか。そして、抒情の湧き水となったのが短歌であったと考える。改めて、芥川の短歌に光を当てて読み解き、短歌によって涵養した抒情性が小説に活かされていることを、「秋」「六の宮の姫君」「保吉

の手帳から」「白」「河童」「蜃気楼」の作品から明らかにした。

更に、「越びと」は、高い評価を得て、形式と韻律の追究が花開いた。「越びと」は、全歌作の韻律と詩情の頂点にあると言われるが、「最も詩に近い小説」の可能性へ、また、口語自由詩への、模索の一つではなかったのかと考える。そして、何よりも芥川は短編小説作家である。凝縮された和歌・短歌の芸術性、純粋性が作家活動を支えていたと言える。

次に、廣子の立場から、芥川の旋頭歌「越びと」をどのように受け止め、芥川龍之介の最後の恋人、「越びと」と位置付けられてきたことをどう感じていたのかを確認した。芥川と廣子が大正歌壇の中で出会い、魂を触れ合ったのは、期間にすれば僅かな重なりである。芥川と廣子は互角の才能を持ち、心を培う相手として、互いに強く惹かれあったのであろう。芥川は家長としての責任と脱出の狭間で揺れた。廣子は恵まれた西洋的な教育を受けながらも、時代と家柄ゆえに、矛盾やずれを感じるところも多くあった。芥川の死から三年を経た昭和五年。堀辰雄は小説「聖家族」に、芥川と廣子の交流を書き、作品中には娘の總子までもモデルとする。これを機に廣子は翻訳を止め、中断していた短歌は昭和十一年まで「心の花」への掲載はない。しかし、戦後になって晩年の廣子は、大切な亡き人々のために気力を振り絞り、芥川からの享受である「越びと」の名にふさわしく、再び歌作や翻訳に励んだのだと考える。

四、結論

本論文十章の考察から、以下の点を明らかにした。若き日の第一歌集『翡翠』から、晩年の第二歌集『野に住みて』へ、幾つかの大きな変化が指摘できる。生活者としての体験からの人間的成長や、翻訳家として伝わりやすい表現を心掛けたこと。また、現実的な生きた言葉の世界から即興詩をつくり出す、アイルランド民謡からの影響があったこと。そして、生き方を模索する幅広い読書姿勢があったことである。これらにより、〈我が世にもつくづくあきぬ海賊の船など来たれ胸さわがしに〉（『翡翠』）の、若き日の自由な羽ばたきに焦がれる内面的世界を夢想的に詠む歌は、〈動物は孤食すと聞けり年ながくひとり住みつつ一人ものを食へり〉（『野に住みて』）の、晩年の「老境の文学」ともいえる象徴性を含む生活詠に変化してゆく。時代と境遇に翻弄されながらも短歌を詠み、アイルランド文学の夢想的世界を、弛まざる努力による翻訳で現実に映し出す。文学的伴侶としての芥川龍之介をはじめ、『心の花』の歌の師である佐佐木信綱など、様々な人々との交流が廣子を育てたことが、書簡等や周辺資料から分かった。

『翡翠』『野に住みて』の二冊の歌集に見える歌の特徴と変容の経過を辿り、歌集未収録歌も加え、「われ」を詠む片山廣子短歌の独自性の究明を目的とすることで、片山廣子短歌の全貌を把握しようとした。第七章、第八章、第九章では、『翡翠』と『野に住みて』を中心に、多用した題材やキーワードを詠み込んだものに分けて短歌を考察し、片山廣子短歌の研究を三章にわたって展開した。第七章では、「われ」が人生に向き合う思いを

込めた歌を読み解いた。同年齢の与謝野晶子が外向的に情熱的に詠むのに対し、廣子は内面的に思索的に詠んでいる。『翡翠』の若い頃の理想を求める夢想的な歌の中にも、深い精神性を湛えるのが、「われ」を詠む片山廣子短歌の独自性であり、晩年の歌集『野に住みて』では更にこの特質が厚みを増していく。初期歌風の形成過程を辿った第三章では、「われ」を詠む出発点としての廣子の清新な短歌が、佐佐木信綱が『心の花』の前に創刊した『いさゝ川』（明治二十九年十月創刊）に、既にあったことを筆者が初めて明らかにし、近代短歌の流れの中で位置付けることができた。廣子の個性的な、「われ」を詠む初期の歌は、合同歌集『あけぼの』『玉琴』には載っているが、それらを削除したことで、『翡翠』は感性や知性の観念性がやや難解な歌集になっていることを指摘した。

第八章は、「家族」に関わるキーワードで読み解いた。「生くる我」の廣子が家族や生活に向き合って人格的な成長を遂げ、題材の捉え方や表現に変化が生まれたと言える。本論文は、新派の発生から自然主義を経て戦後短歌に至る短歌史の中で、同時代の歌人と廣子の歌を対比している。前田夕暮などの自然主義の歌人は、日常の等身大の自分をあるがままに詠んでいるが、廣子は生活詠であっても内面世界に分け入って詠む。アララギ派の歌人の写実の「われ」とも一線を画し、清新で象徴性を含んだ表現で「われ」を詠むことが独自性となっている。一方で、写生詠や口語自由律短歌等も自在に取り入れたことが、作品から確認できた。第九章では、死生観に関わるキーワードを詠み込んだ短歌作品を採り上げた。夫や身近な人達との死別、翻訳をしたアイルランド文学、芥川龍之介との交流からも死生観は短歌に反映されてゆく。病や戦争や様々な困難もあり、「死の影」が廣子に寄り添って、生かされていると感じる死生観に至っている。死生観に加えて、廣子のリベラルな思想、価値観、文学観、社会意識は大きくは変化をしておらず、これらの考えが、短歌作品系列の中で、思索的な廣子短歌の独自性である「われ」の核になるものであることを指摘した。

第十章では、芥川龍之介の短歌を考察することにより、短歌史の展開の中での廣子の短歌の独自性をも明らかにすることができると考えた。なぜならば、芥川は短歌・歌論を通して、隆盛期を迎えていた大正歌壇に向き合ったからである。鍛錬の場として優れた歌人たちと交流し、片山廣子と出会った。文学的伴侶として惹かれた廣子が翻訳や作歌において常に芥川を意識していたことで、抒情性の涵養と言語表現の修練、形式と韻律の追究への模索を、芥川と共にすることができたのである。芥川は、『翡翠』の歌集評に、廣子の短歌では浪漫的な歌は古く、写実の歌を優れていると評価する。この示唆が、後に廣子の短歌に反映されてゆく。芥川の短歌は、北原白秋、前田夕暮、石川啄木、斎藤茂吉等の模倣的な作品が多く評価は高くない。しかし、芥川の短歌は浪漫の域を出ない間は独自性が感じられないが、自然体の何気ない生活を詠んだものや、象徴的な歌には、写生・写実の具体が主流であった時代にあって、独自に達成した力があると言える。

象徴的な生活詠という新たな展開に、芥川の短歌から廣子の短歌への影響を推察できた。

一方、廣子は芥川の自裁以降は翻訳の筆を折ったという説が多い。第五章では、改めて原文と翻訳を対比し、芥川の死後も、シング作品の再翻訳や、婦人雑誌への翻訳の連載をしていたことを確認した。これによって、昭和五年十一月、堀辰雄が芥川と廣子の娘の總子をモデルにした「聖家族」の発表をした以降に、廣子は翻訳を中断しているという点を明らかにした。翻訳の断筆の理由を芥川の死とする従来の説に、修正を加えることが可能と考えるものである。

片山廣子の短歌は、『いさゝ川』の旧派の歌風と新派の発生に始まり、自然主義を経て戦後短歌に至る。明治、大正、昭和の短歌史と共に、内面的世界を夢想的に詠む歌から、晩年の象徴性を含む生活詠に変化してゆく。アイルランド文学翻訳家「松村みね子」として近代日本を先駆けた仕事をし、歌人の片山廣子として芥川龍之介等の文学者や歌人達との交流の中で様々なものを取り入れた。封建的社会制度と困難な時代と生活の中で、近代的な自我としての「われ」と対峙し、深い精神性を湛えた「われ」を詠む短歌の独自性を確立することが出来たと言える。